

## 博士課程で学んだことを国際保健の実務に生かす

執筆者：関根 一貴 2016 年度（5 期生）

修学機関：東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻（2021 年 11 月博士号（保健学）取得）

研究テーマ：ネパールにおける児童婚のリプロダクティブヘルスへの因果効果とそのメカニズムに  
ついての混合研究

### 略歴（せきね かずたか）

バーミンガム大学から貧困削減修士号、ロンドン大学公衆衛生・熱帯医学大学院から公衆衛生修士号と疫学修士号を取得。東京大学大学院医学研究科から博士号（保健学）を取得。これまで NGO、国際協力機構（JICA）、国連児童基金（UNICEF）、国連人口基金（UNFPA）等で働き、ケニア、インドネシア、東ティモール、パキスタン、ネパール、シエラレオネ、ミャンマー、ウガンダの現場で母子保健、保健システム強化、感染症対策に取り組む。2022 年 5 月から UNICEF 地域事務所で南アジア 8 カ国の妊産婦・新生児保健プログラムに従事している。

---

### 博士課程を振り返って

東京大学医学系研究科国際保健学専攻の博士課程の学生として、ネパールの児童婚がリプロダクティブヘルスに与える影響について研究していました。研究内容は前回のエッセイに記載したので、ご興味がありましたらご覧ください。当初の計画からは大幅に遅れてしまったものの 2021 年 11 月に学位を取得することができました。学位取得前に、学位論文として執筆した論文 2 編を BMJ Open という学術誌に掲載し、同研究に一区切りをつけることができました。研究結果や詳細については、以下のリンクからダウンロードすることができるので、ここでは割愛させていただきます。このエッセイでは、博士課程を振り返って、博士課程での収穫がどのように現在の仕事に関係しているか、そして博士課程への進学を検討している人へのアドバイスを記したいと思います。

<https://bmjopen.bmj.com/content/11/4/e043532.abstract>

<https://bmjopen.bmj.com/content/11/10/e046156.abstract>

### 博士課程での収穫

目標であった博士号という学位を取得できたこと以外に、博士課程での経験は大きな収穫があったと言えます。その中から特に重要だと感じたものを以下に挙げます。

1. 博士課程を通じて学んだ文献検索方法、目的に応じた文献の読み方、各種ツール（統計分析ソフト、質的分析ソフト、レファレンスソフトなど）の使い方、統計分析、論文の書き方は、現在の仕事でも非常に役に立つスキルです。文献調査から knowledge gap を特定できること、調査研究計画を策定できること、データ分析に強いこと、論理的で読者を迷子にさせない論文や報告書を執筆できることは、現在の職場では評価されています。
2. 定性的研究と定量的研究を組み合わせた混合研究を選んだことで、両方の手法について知識とスキルを獲得することができました。国際開発の実務で質的データも量的データも両方とも扱うことが多いため、仕事で担当するときに両方ともわかっていると強いと思います。
3. ネパールの現地でデータ収集するために、現地パートナーを見つけ、フィールドワークの予算とチームを組み、データ収集を監督する経験から、データ収集の大変さ、データにバイアスが入り込まないようにする方法などを学ぶ機会が得られました。それらを直に経験することができたのは財産となりました。実務でデータ分析を扱う仕事をする際に、データ自体にバイアスがかかっていないかデータの裏側にも洞察が及ぶようになり、データの信ぴょう性を考察するなど批判的思考が身に付きました。
4. わからないことがあっても能動的に調べて学んでいく姿勢、辛抱強く粘り強く分析し考えることが習慣となったことは、実務で目標を達成する、または成果を出すために必要なことであると感じています。

## 現在の仕事と研究の関係

UNICEF 地域事務所の役割の一つとして、国事務所のプログラムの実施に技術的なインプット、技術的な支援をすることが挙げられます。そのため、担当分野において高い専門性が求められます。国際協力では「専門性」というつかみどころがない言葉がよく使われていますが、あくまで一例として、私の現在の仕事で求められる専門性のレベルは、相手国を代表するような政府関係者や専門家ととともに議論ができて、必要な施策を根拠をもって提案することができる程度と定義することができます。求められる専門性のレベルに見合うように、博士課程で学んだことは非常に役立つもののそれだけでは不十分で、国際機関等が発表する新たな政策や戦略に精通し、新しい研究論文を読み、知識の幅を広げ・深める努力をしています。また、国事務所の職員や政府関係者と議論することで国レベルの政策や戦略、保健プログラムへの技術的な貢献ができるよう努めています。現在の実務では、南アジア諸国の新生児死亡と死産について文献レビューし、インタビューを通じて相手国政府の保健プログラムの問題点を探り、改善する方法を助言する業務をしています。文献を検索し読む、文献ではわかっていないことを特定する、インタビューを通じて情報収集する、解決策を提示するなど、博士課程で学んだことが生きる場面は多いと感じています。

## 博士課程入学を考えている人にアドバイス

「修士課程は迷ったらやったほうがいい、博士課程は迷ったらやめたほうがいい」という言葉を聞いたことがあります。特にこの言葉の後半部分に共感しています。博士課程は数年間のコミットメントが求められ、険しい道のりとなることが多いと思います。学位を取らずに退学する人も多いです。私の実感としては、「何があっても立ってられる人」が博士課程を修了できる傾向があると思います。研究計画を何度も練り直しても、不慮の事態により研究計画の通り実施できないことも起こりえます。分析が思い通りに進まないこともありますし、分析結果の学術的な意義に疑問を呈されてしまうこともあります。

す。また論文の執筆では教員から 100 近くのコメントに対応し、リバイズを繰り返す作業が続きます。新たな知識を創出し、それを学術研究のコンテクスト（文脈）に位置づけることで、学術的に意味のある貢献をすることが博士号取得の要件となるため、非常に厳しい道のりでした。やり抜くために学んだこととして以下が挙げられます。

1. 途方もなく大きいと感じる課題でも、一つ一つの作業を小さくすることで、達成することができる。博士論文の完成には石を 1000 個くらい積み重ねていく作業と思って一步一步進めました。
2. 最初のステップを小さくすること。完璧でなくていいのでまずは取り組んでみて、アウトプットを出してみる。例えば論文執筆において、キーワードを並べて、順番や関係性を考えて、パソコンに入力することで、とりあえずのアウトプットとなり、これを見直すことで徐々に良いものにしていくことを心がけていました。
3. 自分の置かれている状況を笑えるようになること。博士課程の学生は精神的に追い込まれ、卒業後の進路や将来の不安から鬱病などの精神疾患を発病することが多いと聞きます。同じ境遇の学生と経験を共有したり、相談することで解決策が見えてくることがあります。また、著作権の問題で掲載できませんが、「PhD Memes」と検索すると博士課程の学生の大変さを可笑しく表現したものが見付き、共感できるもの、クスリと笑えるものを見て疲れを癒していました。

最後に、FASID 奨学金プログラムを通じて学業と研究活動にご支援いただいたことに大変感謝しています。今後も実務と研究の両面において、国際保健の課題解決に貢献できるように尽力していきたいと思えます。



写真 1：ネパールのバラ県においてデータ収集した対象の村の様子

FASID 奨学金プログラム  
奨学生による寄稿（2022 年度掲載）



写真 2 : UNICEF 南アジア地域事務所の入り口にて